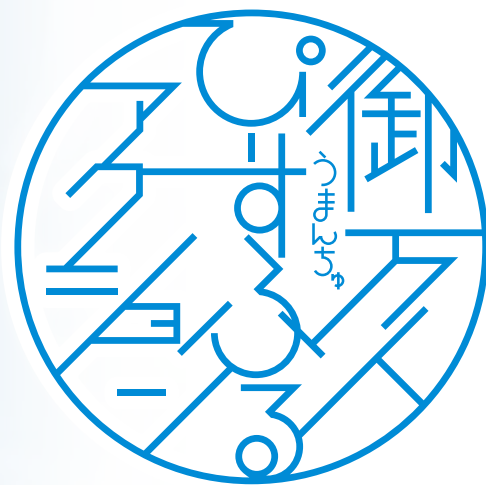


御万人が  
すふる  
アクション  
令和3年度  
沖縄平和啓発プロモーション事業  
事業実施報告書



うまんちゅ  
御万人びーすふるアクション

令和3年度  
沖縄平和啓発プロモーション事業

事業実施報告書



沖縄県





うまんちゅ  
御万人びーすふるアクション

令和3年度  
沖縄平和啓発プロモーション事業

事業実施報告書

目次

- 02 御万人びーすふるアクション 事業概要
- 03 びーすふるメッセンジャー
- 04 びーすふるワークショップ
- 17 びーすふるシンポジウム
- 34 御万人びーすふるアクション 成果報告巡回展 実施概要
- 35 巻末付録



# 御万人びーすふるアクション 事業概要(全体)

<b>事業名</b>	御万人びーすふるアクション(沖縄平和啓発プロモーション事業)
<b>事業主管</b>	沖縄県子ども生活福祉部女性力・平和推進課 平和推進班
<b>事業受託</b>	株式会社サン・エージェンシー
<b>事業期間</b>	令和3年9月～令和4年3月
<b>事業目的</b>	悲惨な沖縄戦の実相や教訓を正しく次世代に継承していくとともに、平和を希求する「沖縄のこころ」を県内外に発信し、より多くの人々に深く理解してもらうため、児童生徒及び学生を対象としたワークショップや、県外でのシンポジウムを開催する。 これまでに県に蓄積された資料等を活用して、より多くの人々に深く理解してもらうことを目的とする。
<b>事業名称について</b>	本事業の正式名称は「令和3年度 沖縄平和啓発プロモーション事業」であるが、積極的な情報発信と啓発をもってより平和への行動(アクション)を促すとの事業目的を鑑み、事業初年度(昨年度)から「御万人(うまんちゅ)びーすふるアクション」の愛称を設定し取り組みを展開している。
<b>取組内容</b>	<b>1)「沖縄のこころ」を発信するファシリテーター「びーすふるメッセンジャー」の募集、育成</b> 県内在住の一般社会人、大学生から応募のあった8名を認定して事前研修および実践研修を行った。 <b>2)「沖縄戦の実相を伝え、ともに平和を考える」ワークショップの実施</b> 小中高および専門・大学を対象として、沖縄県外3校、県内6校の合計9校の予定でワークショップ開催希望校を募集した。実施校は県外4校(4回)、県内6校(7回)の応募があったが、県外2校については新型コロナウイルスの影響(まん延防止等重点措置の発出)により中止となった。 <b>3)「沖縄戦の継承、新時代における平和を考え、アクションにつなげる」シンポジウムの開催</b> 沖縄平和賞受賞団体、および沖縄戦の記憶の継承に取り組む団体から講師をお招きし、講演を行うとともに、パネルディスカッションを行う2部制のシンポジウムを企画・開催した。  (次頁以降にて詳述)

びーすふるメッセンジャー 活動希望者募集フライヤー

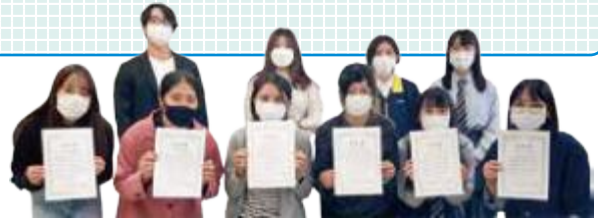


びーすふるワークショップ 受講希望校募集フライヤー





# ぴーすふるメッセンジャー



**募集期間** 令和3年9月5日～10月31日

**活動期間** 令和3年10月～令和4年3月

**活動人員** 8名

**メンバー**  
 大城奈津貴氏（おおしろ・なつき、22、大学生）  
 阿山咲春氏（あやま・さくら、22、大学生）  
 島袋優氏（しまぶくろ・ゆう、22、大学生）  
 運天ももこ氏（うんでん・ももこ、22、大学生）  
 大城藍礼氏（おおしろ・あいら、17、高校生）

徳永真里氏（とくなが・まり、45、団体職員）  
 友寄玲子氏（ともよせ・れいこ、49、事務職）  
 宮城愛氏（みやぎ・あい、22、大学生）  
 ※順不同、年齢は満年齢

● R1・R2年度メンバー(21名)から継続して協力頂いた方

比嘉共樹氏（ひが・ともき、48、中学教諭）  
 ウィンフィールドひろみ氏（ういんふいーると・ひろみ、56、保育園園長）  
 仲本和氏（なかもと・わたる、22、大学生）  
 平良奈都氏（たいら・なつ、17、高校生）  
 加藤綾華氏（かとう・あやか、17、高校生）  
 ※順不同、年齢は今年度のもの



**応募概況** 沖縄から平和のメッセージを届けるメッセンジャーの役割を担うべく「ぴーすふるメッセンジャー」の名称で人材募集を行った。

令和3年9月5日から募集を開始した。新型コロナウイルス感染症の状況もあり、過去3年間の募集で一番苦戦した。結果として8名の応募者をメッセンジャーとして認定した。

その内訳は新聞広告から1名（一般）、SNS広告から1名（一般）、学校での募集活動や紹介（大学生、高校生）となっている。

**事前研修** 応募状況と事業進捗の状況に応じて、令和3年10月24日（日）に6名、11月1日（月）と11月16日（火）にそれぞれ1名ずつ、事前研修を行った。

自己紹介を兼ねたアイスブレイクの後、本事業で進めていくワークショップの内容に沿ったテーマで研修を進めた。

沖縄戦に関する知識などはもちろんだが、特に大事にしたいのは、大学生以下の若い世代を対象としているので、「相手の考えを尊重する」「自分の意見を押し付けない」ディスカッションの在り方と、授業を受ける側と同じ目線で語ることなどコミュニケーションに重きをおき、メッセンジャーとしての役割を明確化した。

「平和を押し付ける」のではなく「平和について自分なりに考えてみる」ことのきっかけとなるワークショップを目指していると結んだ。

**実際の活動** ぴーすふるメッセンジャーの活動は、各自の仕事または学業に支障のないスケジュールで行うものと定め、ワークショップ1校に原則としてメッセンジャー3名を基本として展開した。また、東京で行われたシンポジウムにはスケジュールの確保できた4名のメッセンジャーを帯同、イベントスタッフとして本事業を支えた。（活動の様子は後述）



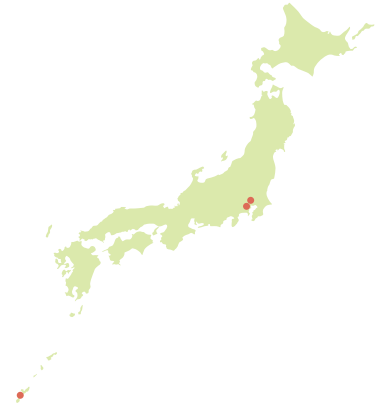


## 令和3年度 ピーすふるワークショップ実施概要

**実施期間** 令和3年10月～令和4年2月

**実施校**

沖縄県立コザ高校	(令和3年10月21日/1160名)
沖縄県立中部農林高校	(令和3年11月10日/41名)
私立沖縄国際大学(1回目)	(令和3年12月6日/70名)
私立沖縄国際大学(2回目)	(令和3年12月9日/70名)
沖縄県立真和志高校	(令和3年12月20日/23名)
沖縄県立陽明高校	(令和3年12月22日/37名)
東京都立調布北高校	(令和4年1月19日/240名) オンライン
横浜市立南中学校	(令和4年1月20日/180名) オンライン
島根県吉賀町立柿木中学校	(令和4年1月27日/29名)
※沖縄・島根両県のまん延防止等重点措置発出に伴い中止	
島根県津和野町立日原中学校	(令和4年1月28日/15名)
※沖縄・島根両県のまん延防止等重点措置発出に伴い中止	
沖縄県立具志川高校	(令和4年2月7日/60名)



以上、県外4校(4回)、県内6校(7回)の実施を決定したが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い発出されたまん延防止等重点措置のため、県外4校のうち2校はオンライン、2校は中止となった。

実施合計は県外2校(2回420名)、県内6校(7回1461名)となった。

**概況**

小中高校大学などを対象に、沖縄戦の実相を伝え、平和について考えてもらうことを目的に開催した。

「プロパガンダに左右されず、自分の視点で社会を見つめ、平和について考えるきっかけにしてみたい」というテーマをさらに発展させて、「自分なりの答えを導き出すヒント」までたどり着けるようなプログラムを組んだ。

講座の前半「沖縄戦の実相」を伝え、後半は「平和の実現について」それぞれの立場から考えるディスカッション型とする形は踏襲した。

前半の「沖縄戦の経緯」についてもロールプレイングを交えた形式も取り入れるなど「自分事」を意識させるように展開、後半では昨年から取り入れた「プロパガンダに騙されない意識」「メディアリテラシーの大切さ」を説くプログラムに加えて、社会について見るべき要素(メディアや教育、法律などの流れ)についての解説も入れた。

講座においては事業の説明、メインファシリテーターに加えて「ピーすふるメッセンジャー」3名～5名に参加してもらい、講座前半の「沖縄戦の経緯」のときには生徒を知識面で補助するアドバイザーとして、後半には仮想の国で「社会をファシリテートする」ことになった学生・生徒に対して、ファシリテートのヒントやコツを提供する役目(ファシリテートをファシリテーションする)を演じてもらった。



### ▼沖縄県立コザ高校(令和3年10月21日/1160名)

今年度最初のワークショップは、全校28学級1160名という非常に大規模なものになった。当初は体育館での授業も検討したが、感染予防対策もあり「開催校の視聴覚教室から28教室と結ぶオンライン講座」という形態で、本事業では初の試みとなった。

前半は「戦時下の住民の行動」を疑似体験するロールプレイングを交えながら行い、様々な場面で「家族や友人」が死んでいく戦場の怖さを、後半部分では「知らぬ間に戦争に誘導されていく社会の流れ」の見るべきポイントを伝えた。

オンラインだが、なるべく各教室の状況を共有できるよう実況を交えて展開した。学年によって、またクラスによって受け止め方やレスポンスの違いも見られたものの、講座の展開は概ね順調であった。コザ高校はWi-Fi環境の整備が非常に進んでおり、28学級1160名というこれまでに最大規模にも関わらずシステムの障害もなく、講座の進行については先生方のご配慮もあってスムーズに進められた。

### ▼沖縄県立中部農林高校(令和3年11月10日/41名)

中部農林高校では従来形式(直接対面)でのワークショップとなり、琉球朝日放送の取材カメラも入ったため、全体的に賑やかな講座となった。前半の「沖縄戦の経緯」から興味をもって講座に取り組む姿勢が見られ、後半の「プロパガンダ」においても活発なディスカッションが展開された。

3名参加してもらったメッセンジャーのうちのひとり(大学生)は中部農林高校の卒業生で、母校の後輩にも平和への思いを考えてほしいと志願してメッセンジャーに応募してきた経緯もあり、熱心にコミュニケーションを取っていた。

なお、取材されたワークショップの様子は当日夕方のニュースで報道された。

### ▼私立沖縄国際大学(1回目)(令和3年12月6日/70名)

今年度事業の慣習に携わって頂いていた沖縄国際大学(地域行政学科)野添文彬准教授のご協力により、私立大学では初めてのワークショップが開催された。

まず授業の時間が90分×2回と余裕があること、また大学生は沖縄県外の出身者も少なくないため、まず沖縄戦の経緯について細かく説明したうえで、住民視点でのロールプレイングに臨んだ。

「20万人以上が亡くなった」と、ひと言で括られてしまう失われた命が、どのようなシチュエーションで失われていったのか。常に生命の危機に脅かされ続け、非道な選択を強いられる戦場の様相が少しでも実感できるように、細かなディテールまで時間をかけて解説した。

### ▼私立沖縄国際大学(2回目)(令和3年12月9日/70名)

2回目の授業は前回の振り返りからスタートし、戦場の実相について思い出してもらったあと、「戦争と平和の作り方」というテーマから、「戦争を作る」ワークをやってもらった。中高生に向けたワークより深く広く、考える要素も2倍の8つ(資金、兵士、情報、敵国、法律、教育、戦争開始、反戦団体)と設定した。

より深い広い思考を促すために学生同士のディスカッションを促し、また学生の声をマイクで拾いながら進行した。

自分たちが戦争を作るために考えた内容と似たようなことが戦前の日本で行われていた事実をより詳しく学ぶ、社会が戦争を応援する(または容認する)方向へと流れていないか、見つめる視点を持ってほしい。

さらには大学生向けとして「戦争の遺し方」というテーマを追加した。

これは、過去の戦争(沖縄戦、太平洋戦争)の犠牲者を「美化」することで、「戦争賛美」につながるのではないかという市民からの指摘があったニュースと、戦争に関わる一切の厚意を否定するという沖縄県平和祈念資料館の設立理念の2つを軸に、「戦争をどのような表現で伝えていくか」によって、社会の流れが決まりかねない危うさを説いた。



### ▼沖縄県立真和志高校(令和3年12月20日/23名)

3年連続3回目の開催となった。

例年大人しめのレスポンスだったので、今回は学生が話しやすいポイントから始める、メッセージのほうから積極的にコミュニケーションを取って、会話しやすい雰囲気を作る、ということを中心にスタートした。

講座内容もなるべく学生に質問を投げかけて返答してもらい、挙手してもらい場面を増やすなど工夫し、1グループに1名のメッセージ(ファシリテーター、真和志高校の先生方)がついて、話しかけてディスカッションを促した。

例年滞りがちな講座後半のディスカッションでは、学生同士がディスカッションする場面も多く見られた。仮想の国の「国民投票」で自分たちが選んだ「抑止力強化」の選択肢が、実は戦争を始められる状態に近づく道である。という説明はやはり意外なポイントだったようで、賑やかな雰囲気が静まり返った。

また担当だけでなく多くの先生方が教室にいらして講座に参加し、ときには学生と同じ立場でマップを作り、ときにはメッセージと同じ役割を買って出てくださいました。

### ▼沖縄県立陽明高校(令和3年12月22日/37名)

2年連続で社会科合同クラスの授業にお招きいただいた。担任教諭のご理解を得て、前年度メッセージであり、シンポジウムではパネリストとして出席した仲本和氏(大学生)にワークショップのメインファシリテーターを務めてもらった(従来のファシリテーターである狩俣はバックアップとしてメッセージを務めた)。

仲本氏のファシリテーションは独特の間があって、ディスカッションのときは明るく賑やかなクラスが、話を聞くときは静かに聞く、というある意味では理想的な状況になっていた。特に後半の「プロパガンダ」では、最初に国民役である学生に「武力行使/抑止力強化/外交交渉」の三択から「国民投票」で選ばせ(結果は抑止力を選択)、その選挙結果に沿ってプロパガンダを進める、という実際の社会の流れに近い新しい展開を作った。

最終的には抑止力のための武力が整い、戦争が始められる状況になったことで、「大半の戦争が社会にも応援されて始まっている」ことを実証する結果にクラス中が鎮まるなか、学生の皆さんが選択した抑止力は「恐怖を感じたり反発したりする周辺国の抑止力強化の呼び水とならないか?さらにはその抑止力は(国内の)どこに置けばいいのか、という、これまでのワークショップではあまり深く触れてこなかった質問を投げかけるなど、平和を考えるうえでまた別の切り口を学生に提供した。

### ▼東京都立調布北高校(令和4年1月19日/240名)オンライン

昨年度実施できなかった調布北高校で、訪問しての開催予定を変更し、オンラインでの開催となった。

ワークショップ前半は沖縄戦の経緯。そして住民のロールプレイングで「いろいろなシチュエーションで、多くの人が死ぬ」という戦争体験を学んでもらった。これは戦場について実感が湧かない世代に対して、戦場では軍隊同士が戦うだけではなく「非常に多くの住民が巻き込まれた、巻き込まれている」という事実を理解してもらうための手法。

後半は学校の理解を得て「戦争を作ってみよう」という物騒なタイトルを敢えて設定して展開した。240名の学生が考えた「戦争を作ってみる手段」が、戦前の日本でも同じように考えられ、使われていたこと、そして何より「非国民」という言葉で社会を雰囲気が決められていく怖さを学んでもらった。

さすがに高校生はその怖さがすぐに理解できた様子で、グループディスカッションの和やかなムードから真剣な表情に戻る学生も多く見られたのが印象に残った。

### ▼島根県吉賀町立柿木中学校(令和4年1月27日/29名)

※沖縄・島根両県のまん延防止等重点措置発出に伴い中止

### ▼島根県津和野町立日原中学校(令和4年1月28日/15名)

※沖縄・島根両県のまん延防止等重点措置発出に伴い中止

### ▼横浜市立南中学校(令和4年1月20日/180名)オンライン

令和元年度のメッセンジャー比嘉共樹氏(中学校教諭)の紹介により実現したワークショップであり、まん延防止等重点措置の発出により急遽オンラインに切り替えての実施となった。

当初から感染予防でオンラインを一部取り入れての実施予定であったので、特に大きな混乱はなかった。沖縄戦や太平洋戦争に関する認識は高くはなく、修学旅行を前提としていたので、前半の授業を少し長めに設定してもらい、沖縄戦の経緯の解説そしてロールプレイで住民の状況などを体験してもらうなど、まず戦争体験(戦争の悲惨さ)に特化した内容をセッティングした。

後半はここでも「戦争を作ってみよう」という物騒なタイトルを学校側に事前提案し、了解のもとにグループディスカッションで考えてもらった。自分たち(生徒たち)が考えた手法と同じような手法が、実際に戦前の日本でも使われていたことを学び、それらの手法がこの先の日本で(あるいは世界で)使われているかどうか、見極める目を持ってほしいとして、ワークショップを結んだ。

### ▼沖縄県立具志川高校(令和4年2月7日/60名)

3年連続3回目の授業。同校社会科合同クラス(3年生)の授業の一環として開催された。同校はまず平和学習のレベルが高く、例年学生のディスカッションも活発であることが挙げられる。沖縄戦や太平洋戦争に関する知識も平均的によく学んでおり、それだけに「プロパガンダ」に流されにくい傾向がある。

その傾向は今回のワークショップでも遺憾なく発揮され、ディスカッションも活発に行われたが、「いま自分たちが(平和のために)考えた方が、実は戦前にも(戦争に進むために)使われた手法である」という事実が伝えられると、やはり大きく感じるものがあった様子だった。

また今回は特別クラスが60名規模であったため、コロナ感染予防対策として、換気を充分にとった隣同士の2教室に学生を分けてオンラインで結び、ファシリテーターとメッセンジャーが相互に行き来しながら講座を展開した。

## 今年度の ワークショップ について

### 考察

沖縄県内の児童生徒は遍く沖縄戦を中心とした平和学習を受けて育っているので、多少の差こそあれ、平和への思いを持っている人が多い。

だが、その思いについて質問すると、急に「戦争は悲惨。だから平和は大事」という紋切り型の口調になる人も多い。つまり、教わった記憶からそのままアウトプットしているだけで、自分の意見や考えは練り込まれていない。

これが悪いわけではない。むしろ如何なる理由や思いであっても、平和のほうが良いと言えるならば、それが良い。問題は発言している人の体内や脳内では実感が伴っていない言葉になってしまっている、ということだろう。

戦争体験を持つ世代が少なくなり、苦しみや哀しみの証言を直接聞く機会が減った。経済が発展するなかで、沖縄中に刻まれていた戦争のリアルな傷跡も少なくなっていき、日常的に触れられる場所が少なくなった。沖縄戦自体が遠くなりつつあるのだろう。

それでも、世界情勢が戦争から遠くなったわけではない。

むしろ今だからこそ、平和について考えるのであれば、戦争と平和について自分事として考えてもらわなければならない。その自分事の認識を持ってもらうためにワークショップの方向性やプログラムを考えていく。今年度は「プロパガンダ」を少し柔らかくして、名前は物騒だが「戦争の作り方」をテーマにしたプログラムも作った。

つまり「戦争を作るためのプロパガンダ手法」を受講生に考えてもらい、それが戦前にも実際に使われていた手法(実際に学生が考えた手法は、ほとんどが戦前に用いられていたものであった)であると理解してもらい、現代社会の流れのなかで、自分たち学生が挙げたようなことが起こっていないか、見張ってほしいと訴えた。選挙権を得たあるいは近々得るであろう世代には、そのような姿勢で社会に接してほしいと願う。

一方で昨年度課題のままになっていた「オンライン化」については、講座後半の「プロパガンダ」のプログラム形態を変更(メッセンジャーが入らない手法)することで対応可能になった。オンライン講座は大人数にもフレキシブルに対応しやすく、コザ高校(1160名)、調布北高校(240名)、南中学校(180名)など、大きな実績となった。

しかしながら、島根県2校(2校とも公立中学校)のワークショップについては、2校が別の機会にオンライン授業を実施した結果として「(自校に限っては)オンライン授業では効果が得られにくいので、対面以外では実施しない」という考えを持っており、両県におけるまん延防止等重点措置の発出により、残念ながら中止となってしまった。



📅  
令和3年  
10/21

## 沖縄県立コザ高校 1160名

今年度最初のワークショップは、全校28学級1160名という非常に大規模なものになった。当初は体育館での授業も検討したが、感染予防対策もあり「開催校の視聴覚教室から28教室と結ぶオンライン講座」という形態で、本事業では初の試みとなった。

前半は「戦時下の住民の行動」を疑似体験するロールプレイングを交えながら行い、様々な場面で「家族や友人」が死んでいく戦場の怖さを、後半部分では「知らぬ間に戦争に誘導されていく社会の流れ」の見るべきポイントを伝えた。

オンラインだが、なるべく各教室の状況を共有できるよう実況を交えて展開した。学年によって、またクラスによって受け止め方やレスポンスの違いも見られたものの、講座の展開は概ね順調であった。コザ高校はWi-Fi環境の整備が非常に進んでおり、28学級1160名というこれまでに最大規模にも関わらずシステムの障害もなく、講座の進行については先生方のご配慮もあってスムーズに進められた。

L



令和3年  
11/10

## 沖縄県立中部農林高校 41名

中部農林高校では従来形式(直接対面)でのワークショップとなり、琉球朝日放送の取材カメラも入ったため、全体的に賑やかな講座となった。前半の「沖縄戦の経緯」から興味をもって講座に取り組む姿勢が見られ、後半の「プロパガンダ」においても活発なディスカッションが展開された。

3名参加してもらったメッセンジャーのうちのひとり(大学生)は中部農林高校の卒業生で、母校の後輩にも平和への思いを考えてほしいと志願してメッセンジャーに応募してきた経緯もあり、熱心にコミュニケーションを取っていた。

なお、取材されたワークショップの様子は当日夕方のニュースで報道された。



📅  
令和3年  
12/6

## 私立沖縄国際大学 1回目 70名

今年度事業の慣習に携わって頂いていた沖縄国際大学(地域行政学科)野添文彬准教授のご協力により、私立大学では初めてのワークショップが開催された。

まず授業の時間が90分×2回と余裕があること、また大学生は沖縄県外の出身者も少なくないため、まず沖縄戦の経緯について細かく説明したうえで、住民視点でのロールプレイングに臨んだ。

「20万人以上が亡くなった」と、ひと言で括られてしまう失われた命が、どのようなシチュエーションで失われていったのか。常に生命の危機に脅かされ続け、非道な選択を強られる戦場の様相が少しでも実感できるように、細かなディティールまで時間をかけて解説した。

# 災 災 災 災

L



令和3年  
12/9

## 私立沖縄国際大学 2回目 70名

2回目の授業は前回の振り返りからスタートし、戦場の実相について思い出してもらったあと、「戦争と平和の作り方」というテーマから、「戦争を作る」ワークをやってもらった。中高生に向けたワークより深く広く、考える要素も2倍の8つ(資金、兵士、情報、敵国、法律、教育、戦争開始、反戦団体)と設定した。

より深い広い思考を促すために学生同士のディスカッションを促し、また学生の声マイクで拾いながら進行した。

自分たちが戦争を作るために考えた内容と似たようなことが戦前の日本で行われていた事実をより詳しく学ぶ、社会が戦争を応援する(または容認する)方向へと流れていないか、見つめる視点を持ってほしい。

さらには大学生向けとして「戦争の遺し方」というテーマを追加した。

これは、過去の戦争(沖縄戦、太平洋戦争)の犠牲者を「美化」することで、「戦争賛美」につながるのではないかという市民からの指摘があったニュースと、戦争に関わる一切の厚意を否定するという沖縄県平和祈念資料館の設立理念の2つを軸に、「戦争をどのような表現で伝えていくか」によって、社会の流れが決まりかねない危うさを説いた。

L



令和3年  
12/20

## 沖縄県立真和志高校 23名

3年連続3回目の開催となった。

例年大人しめのレスポンスだったので、今回は学生が話しやすいポイントから始める、メッセンジャーのほうから積極的にコミュニケーションを取って、会話しやすい雰囲気を作る、ということを中心に心がけてスタートした。

講座内容もなるべく学生に質問を投げかけて返答してもらい、挙手してもらい場面を増やすなど工夫し、1グループに1名のメッセンジャー(ファシリテーター、真和志高校の先生方)がついて、話しかけてディスカッションを促した。

例年滞りがちな講座後半のディスカッションでは、学生同士がディスカッションする場面も多く見られた。仮想の国の「国民投票」で自分たちが選んだ「抑止力強化」の選択肢が、実は戦争を始められる状態に近づく道である。という説明はやはり意外なポイントだったようで、賑やかな雰囲気が静まり返った。

また担当だけでなく多くの先生方が教室にいらして講座に参加し、ときには学生と同じ立場でマップを作り、ときにはメッセンジャーと同じ役割を買って出てくださいました。

L



令和3年  
12/22

## 沖縄県立陽明高校 37名

2年連続で社会科合同クラスの授業にお招きいただいた。担任教諭のご理解を得て、前年度メッセンジャーであり、シンポジウムではパネリストとして出席した仲本和氏(大学生)にワークショップのメインファシリテーターを務めてもらった(従来のファシリテーターである狩俣はバックアップとしてメッセンジャーを務めた)。

仲本氏のファシリテーションは独特の間があって、ディスカッションのときは明るく賑やかなクラスが、話を聞くときは静かに聞く、というある意味では理想的な状況になっていた。特に後半の「プロパガンダ」では、最初に国民役である学生に「武力行使/抑止力強化/外交交渉」の三択から「国民投票」で選ばせ(結果は抑止力を選択)、その選挙結果に沿ってプロパガンダを進める、という実際の社会の流れに近い新しい展開を作った。

最終的には抑止力のための武力が整い、戦争が始められる状況になったことで、「大半の戦争が社会にも応援されて始まっている」ことを実証する結果にクラス中が鎮まるなか、学生の皆さんが選択した抑止力は「恐怖を感じたり反発したりする周辺国の抑止力強化の呼び水とならないか?さらにはその抑止力は(国内の)どこに置けばいいのか、という、これまでのワークショップではあまり深く触れてこなかった質問を投げかけるなど、平和を考えるうえでまた別の切り口を学生に提供した。

L



令和4年  
1/19

## 東京都立調布北高校

240名 オンライン

昨年度実施できなかった調布北高校で、訪問しての開催予定を変更し、オンラインでの開催となった。

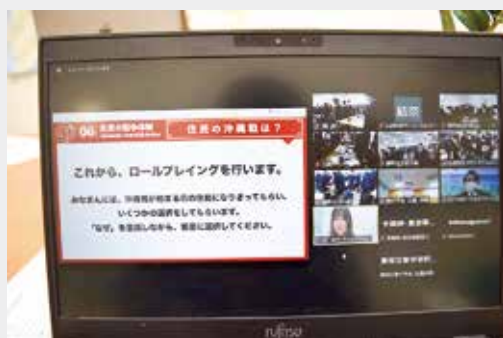
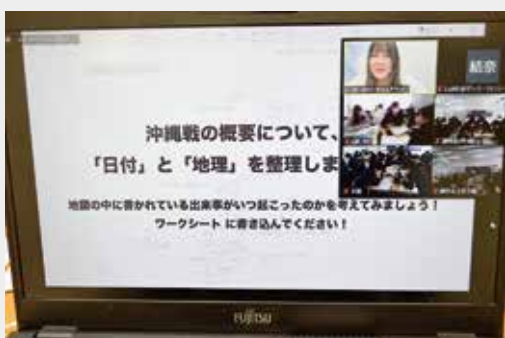
ワークショップ前半は沖縄戦の経緯。そして住民のロールプレイングで「いろいろなシチュエーションで、多くの人が死ぬ」という戦争体験を学んでもらった。これ

は戦場について実感が湧かない世代に対して、戦場では軍隊同士が戦うだけではなく「非常に多くの住民が巻き込まれた、巻き込まれている」という事実を理解してもらうための手法。

後半は学校の理解を得て「戦争を作ってみよう」という物騒なタイトルを敢えて設定して展開した。240名の学生が考えた「戦争を作ってみる手段」が、戦前の日本でも同じように考えられ、使われていたこと、そして何より「非国民」という言葉で社会を雰囲気が決められていく怖さを学んでもらった。

さすがに高校生はその怖さがすぐに理解できた様子で、グループディスカッションの和やかなムードから真剣な表情に戻る学生も多く見られたのが印象に残った。

L



令和4年  
1/22

# 横浜市立南中学校

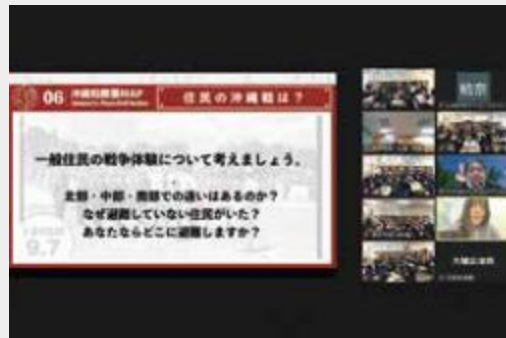
20名  オンライン

令和元年度のメッセンジャー比嘉共樹氏(中学校教諭)の紹介により実現したワークショップであり、まん延防止等重点措置の発出により急遽オンラインに切り替えての実施となった。

当初から感染予防でオンラインを一部取り入れての実施予定であったので、特に大きな混乱はなかった。沖縄戦や太平洋戦争に関する認識は高くはなく、修学旅行を前提としていたので、前半の授業を少し長めに設定してもらい、沖縄戦の経緯の解説そしてロールプレイで住民の状況などを体験してもらうなど、まず戦争体験(戦争の悲惨さ)に特化した内容をセッティングした。

後半はここでも「戦争を作ってみよう」という物騒なタイトルを学校側に事前提案し、了解のもとにグループディスカッションで考えてもらった。自分たち(生徒たち)が考えた手法と同じような手法が、実際に戦前の日本でも使われていたことを学び、それらの手法がこの先の日本で(あるいは世界で)使われているかどうか、見極める目を持ってほしいとして、ワークショップを結んだ。

L



令和4年  
2/7

## 沖縄県立具志川高校 60名

3年連続3回目の授業。同校社会科合同クラス(3年生)の授業の一環として開催された。同校はまず平和学習のレベルが高く、例年学生のディスカッションも活発であることが挙げられる。沖縄戦や太平洋戦争に関する知識も平均的によく学んでおり、それだけに「プロパガンダ」に流されにくい傾向がある。

その傾向は今回のワークショップでも遺憾なく発揮され、ディスカッションも活発に行われたが、「いま自分たちが(平和のために)考えた方策が、実は戦前にも(戦争に進むために)使われた手法である」という事実が伝えられると、やはり大きく感じるものがあった様子だった。

また今回は特別クラスが60名規模であったため、コロナ感染予防対策として、換気を充分にとった隣同士の2教室に学生を分けてオンラインで結び、ファシリテーターとメッセンジャーが相互に行き来しながら講座を展開した。



L

